7　天の原　ふりさけ見れば　春日なる　三笠の山に　出でし月かも

阿倍仲麻呂



月

〈声に出してよんでみよう〉

アマノハラ　フリサケミレバ

カスガナル　ミカサノヤマニ　イデシツキカモ

〈どんな意味だろう〉

大空を振り仰いで見ると、

ふるさとの春日にある、三笠の山に出ていた月だなあ！

（こうして遥か異国で見る月も、故郷で見た月と変わらぬ、同じ月なのだなあ！）

＊「天の原」は、広くて大きな空。「ふりさけ見る」は、遥か遠くを仰ぎ見る、という意味です。春日や三笠は、奈良の地名です。

＊「出でし」の「し」は、直接体験の過去を表す助動詞です。

＊文末の「かも」は、「･･･だなあ！」という詠嘆・感動を表します。

〈作者と出典〉

作者の阿倍仲麻呂（700？－770）は、奈良時代・８世紀の人。716年、16歳の頃、遣唐使の一行とともに留学生として海を渡ります。当時、唐は玄宗皇帝の治世で、開元の治と呼ばれる隆盛期にありました。仲麻呂は、中国名を朝衡（または晁衡）と名乗って玄宗に仕え、玄宗からも厚く信任されました。また、盛唐の詩人である王維や李白などとも交友関係を結びました。しかし、望郷の念は押さえ難く、753年、仲麻呂は帰国の途につきます。「天の原」の歌は、この時詠まれたもの、と言います。

しかし、船は難破(なんぱ)して安南(あんなん)（ヴェトナム）に漂着(ひょうちゃく)、仲麻呂は再び都の長安（現在の西安）に戻り、日本への帰国は果たせぬままに、770 年、亡くなりました。

「天の原」のこの歌は、押さえ難い望郷の思いを詠んだ歌として、現代でも人々に広く愛されています。出典は、最初(さいしょ)の**勅撰和歌集**(ちょくせんわかしゅう)（天皇(てんのう)の命令(めいれい)で編集(へんしゅう)された和歌集(わかしゅう)）である**『古今和歌集(こきんわかしゅう)』**（905 年頃成立(ごろせいりつ)）です。